

日本美術史講義 7 b

2021年秋学期 火曜4限

担当：伊藤 大輔

第4回

【注意】

このパワーポイントスライドは、本講義の**受講者専用**です。

許可無く、複製・公開すること、あるいは知り合いや友人へ転送することは**禁じます**。個人の学習のみに使用して下さい。

違反しますと、**作品の所有者、写真の撮影者、写真の出版元等の権利者**とトラブルになる可能性があります。

トラブルを避け、自分の身を守るという観点から、制限にご協力下さい。

はじめに

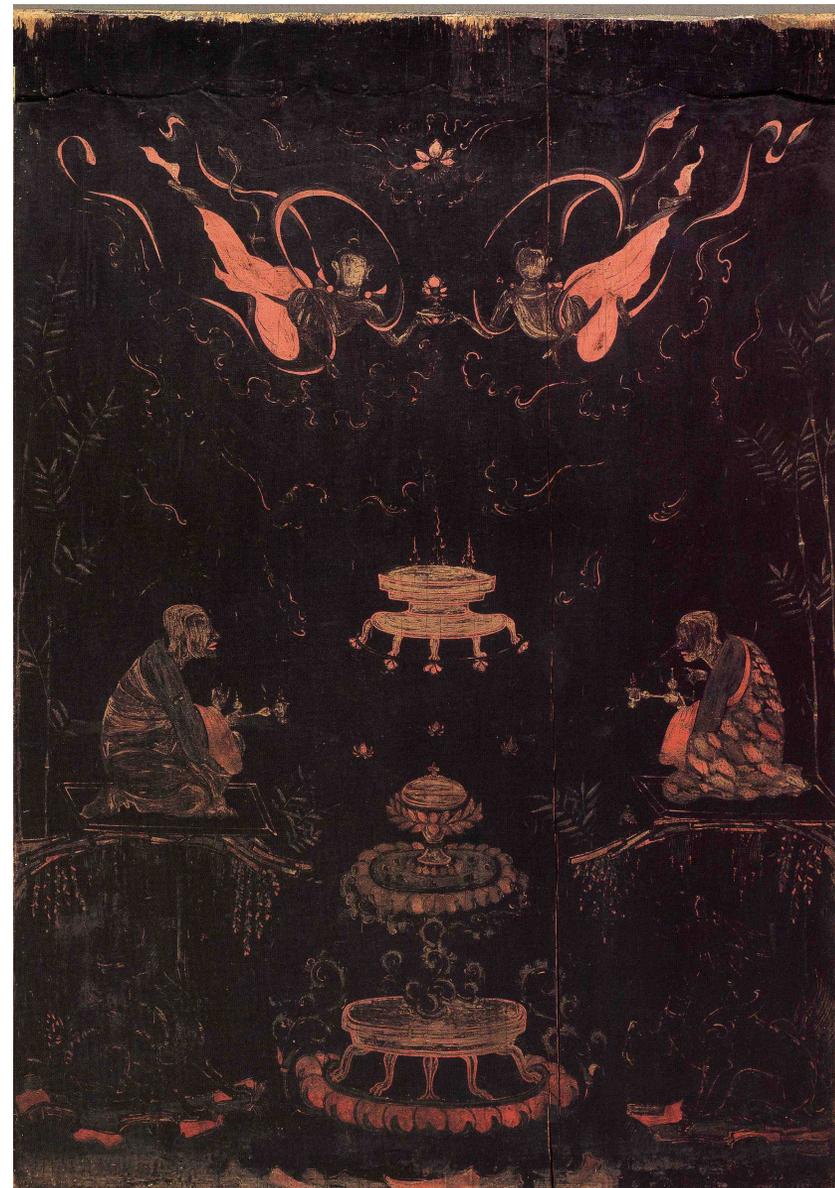
今回は、宮殿部の絵画を見た前回の続きとして、「玉虫厨子」の須弥座に描かれた絵画について学びます。

①玉虫厨子の絵画（続き）

（1）須弥座 正面 舍利供養図

描かれているのは、上から

1. 宝相華
2. 天人
3. 香炉台
4. 柄香炉を持って山岳上で相對する僧侶
5. 蓮華座上の台・台脚付蓮弁飾の合子・そこから生える蓮華
6. 蓮華座上の獣脚付の台
7. 6の左右の岩上に有翼の獅子風の靈獸



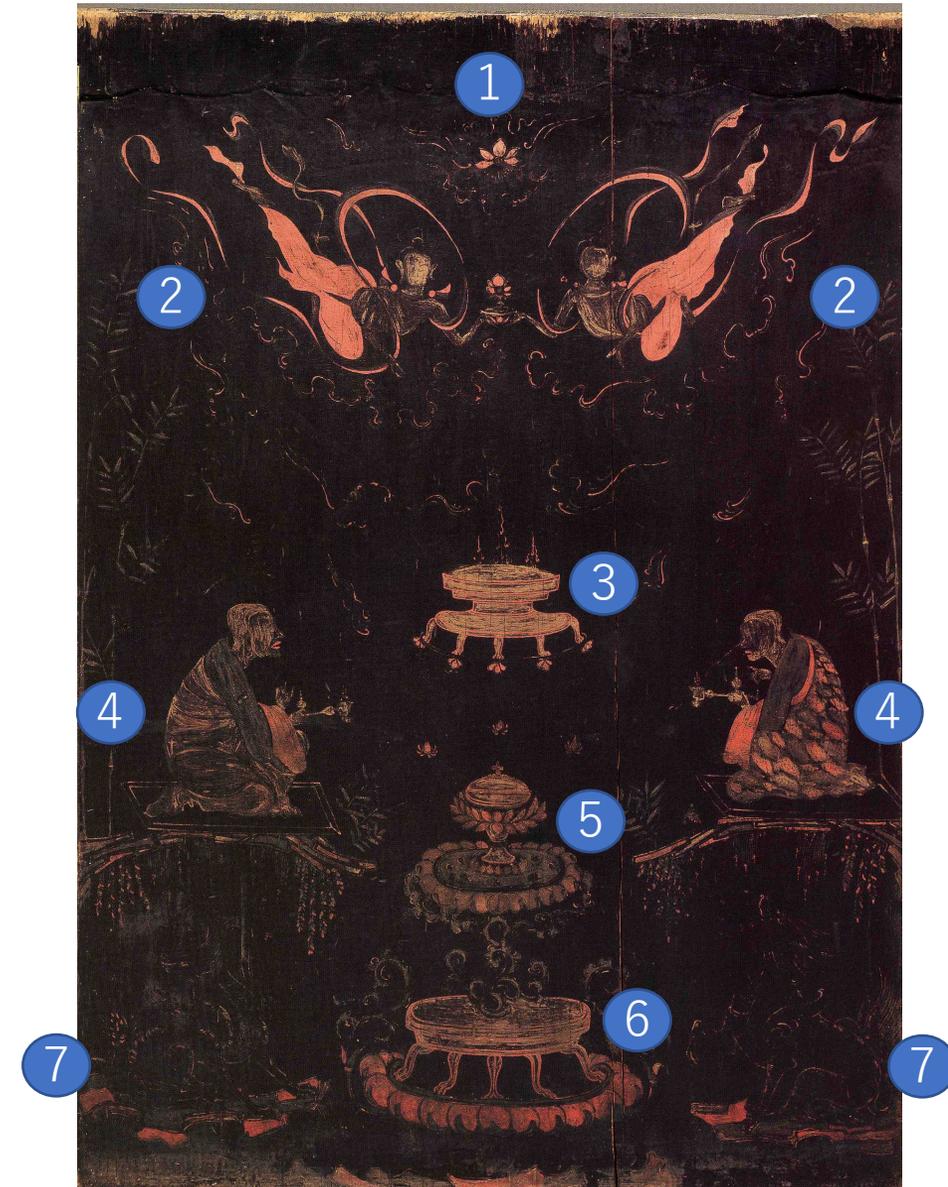
【次頁に番号と図を対照させたものがありますので、参照して下さい。】

①玉虫厨子の絵画（続き）

（1）須弥座 正面 舍利供養図

描かれているのは、上から

1. 宝相華
2. 天人
3. 香炉台
4. 柄香炉を持って山岳上で相對する僧侶
5. 蓮華座上の台・台脚付蓮弁飾の合子・そこから生える蓮華
6. 蓮華座上の獣脚付の台
7. 6の左右の岩上に有翼の獅子風の靈獸



①玉虫厨子の絵画（続き）

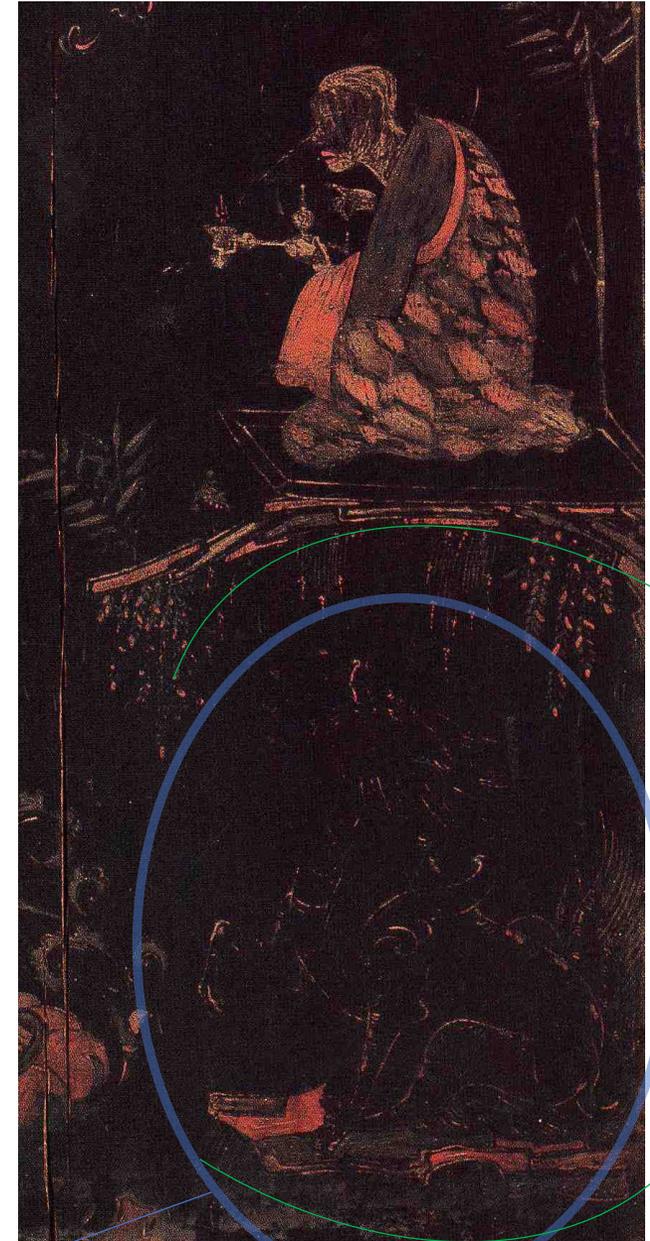
【「舍利供養図」の表現の特色1】

僧と靈獸（獅子）は、宮殿部背面の靈鷲山と同じく、骨片状の岩をC字形に組み上げた山岳（**緑**の線）の中に描かれている。

↓

ここでも古代的な靈山の表現が行われていた。

六大寺大観 法隆寺5 建築・工芸・絵画（岩波書店）
奈良六大寺大観刊行会、2001



靈獸（獅子）←

①玉虫厨子の絵画（続き）

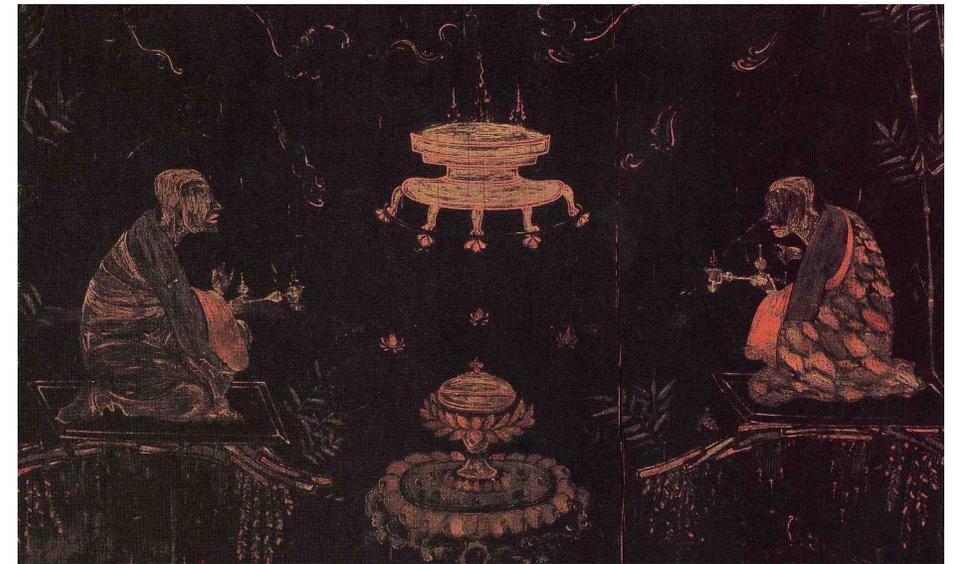
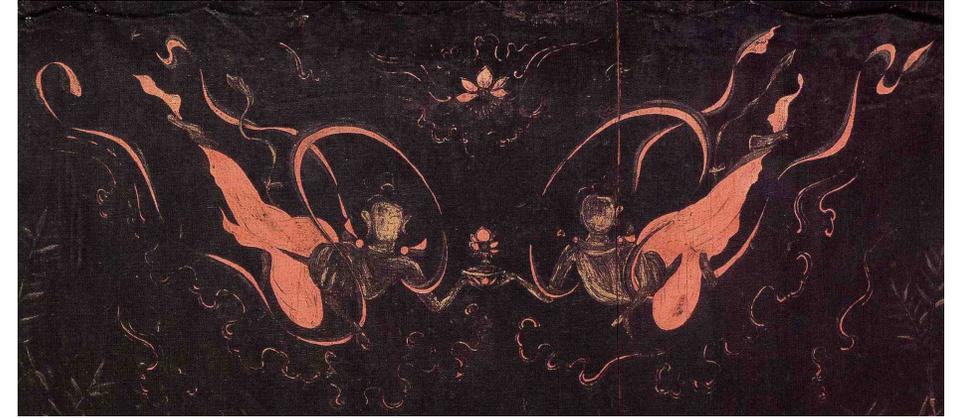
【「舍利供養図」の表現の特色2】

水平視と俯瞰視という二つの視点が混在している。



空間の統一性よりも、対象のわかりやすさを優先する。

空間の統一性を重視する唐代以前の表現意識を見せている。



天人や僧侶、山岳などは、横から水平視している。
香炉などはやや斜め上から俯瞰視している。

①玉虫厨子の絵画（続き）

香炉類は**俯瞰視**がされるが、三台の器物各々で、俯瞰の角度は異なる。



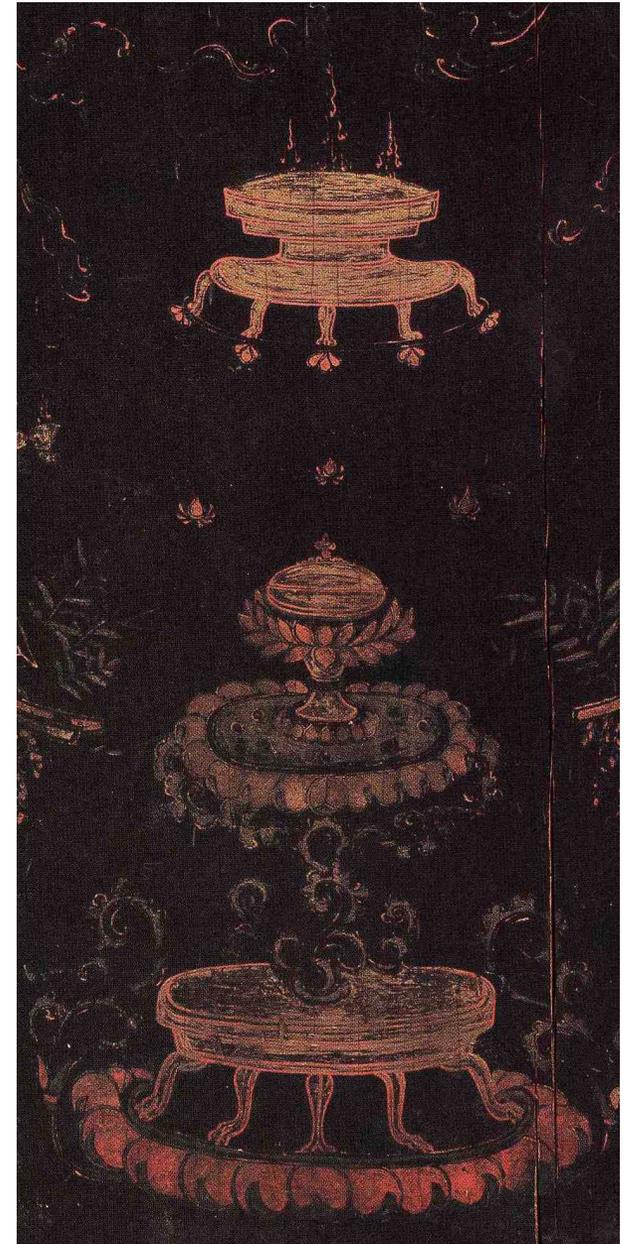
俯瞰視においても、視点の統一性は欠いている。

全体として唐以前の古様さを残す画風である。

水平視に近い →

俯瞰視が強い →

上二者の中間的な角度 →



【以上で、須弥座正面の「舍利供養図」についての説明を終わります。】

【続いて、須弥座の左右側面に描かれた絵画について解説します。】

①玉虫厨子の絵画（続き）

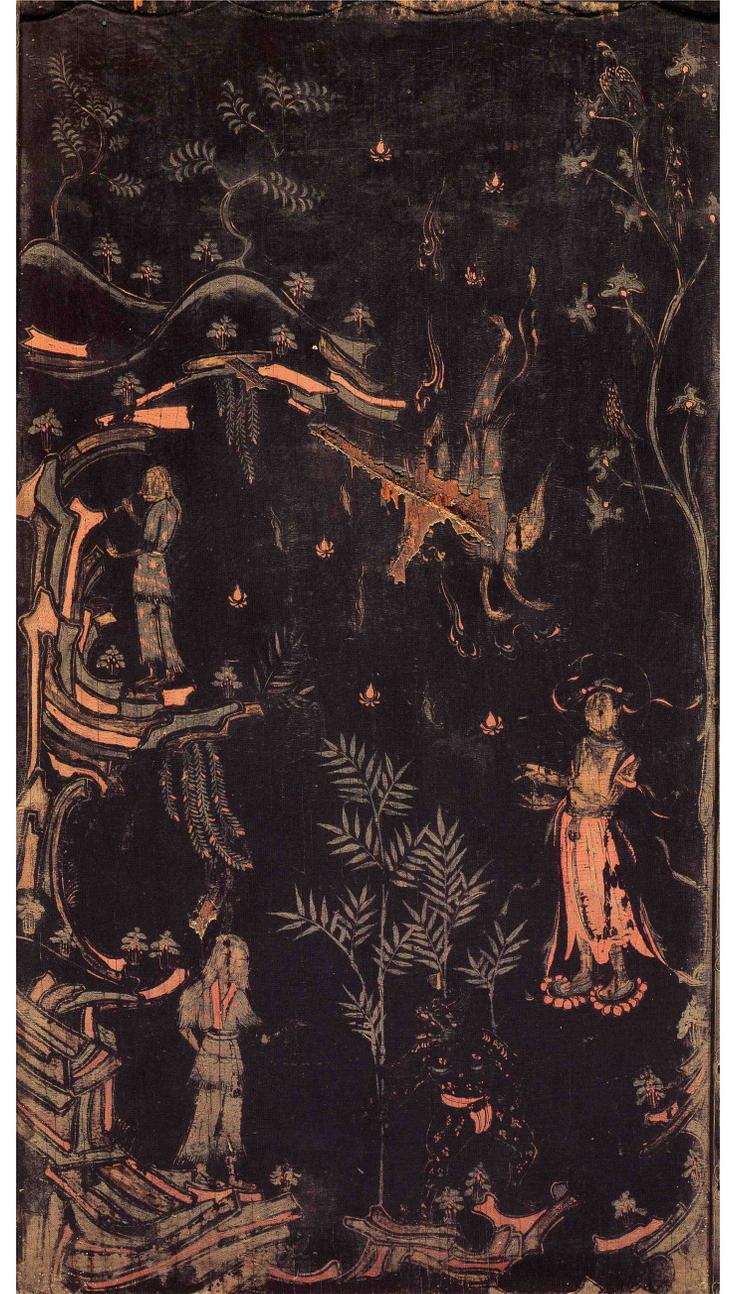
（2）須弥座 向かって左側面

施身聞偈図（せしんもんげず）

釈迦の前世について語る「**本生譚**」（ほんじょうたん）の一つ、「**雪山童子本生**」（せっせんどうじほんじょう）に基づく物語絵画。

『大般涅槃経』の「聖行品」に基づく。

物語の進行に応じて、三つの場面を組み合わせている点に特徴がある。「**三契点表現**」と言います。



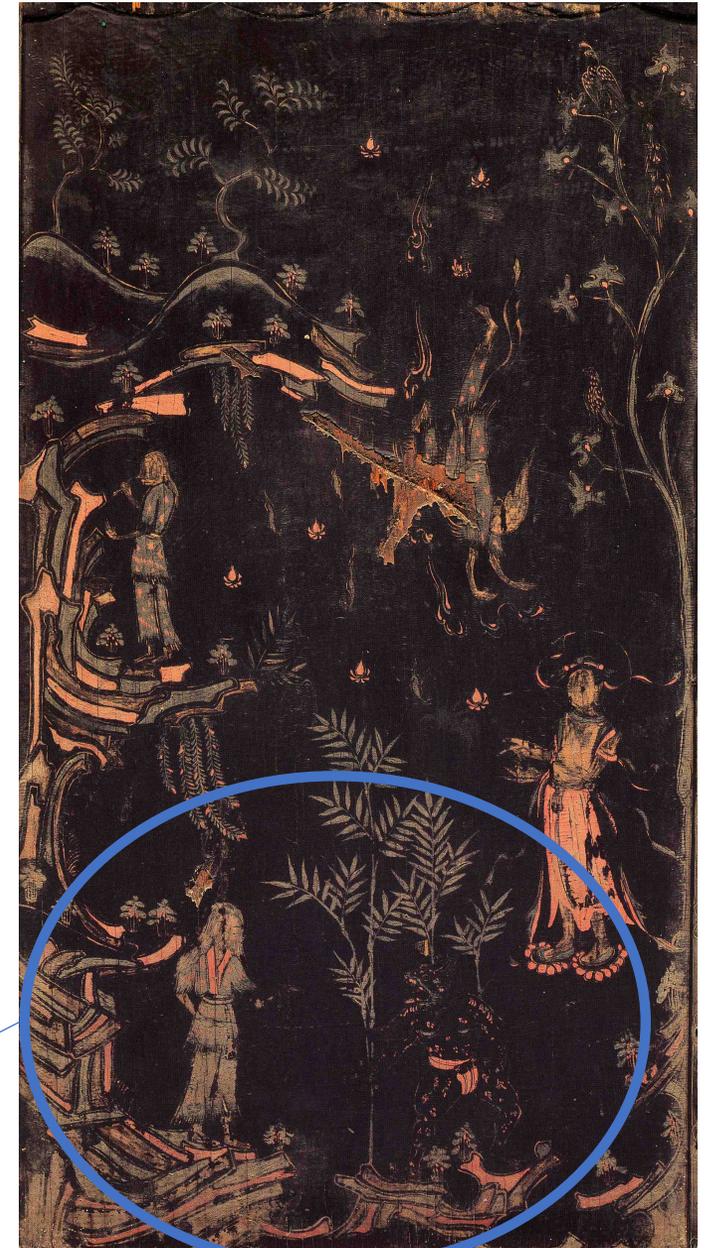
①玉虫厨子の絵画（続き）

【物語の進行】

1. 雪山童子（釈迦の前世）は、羅刹から「諸行無常、是生滅法」の偈を聞く。

後半の句を教える代償に、自らの身体を羅刹に与えることを約束する。

童子と羅刹が問答している



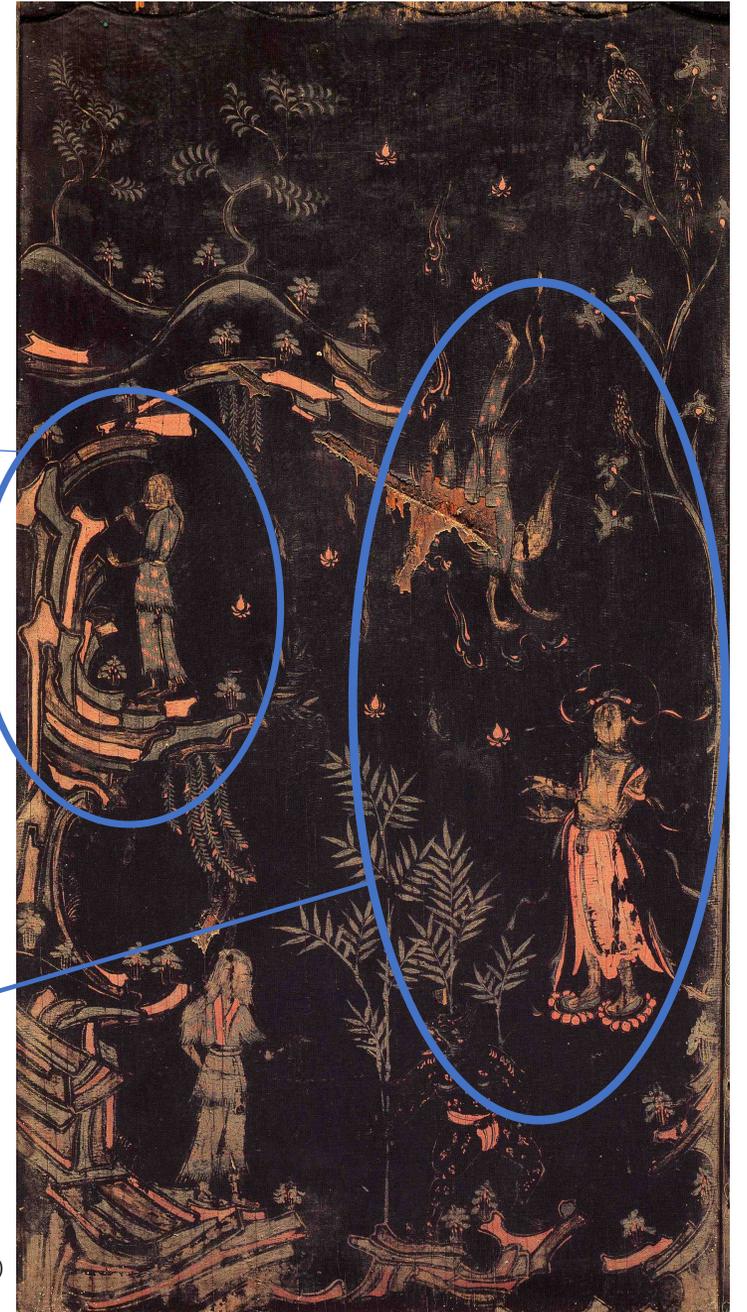
①玉虫厨子の絵画（続き）

2. 後半の句「生滅滅已、寂滅為樂」を聞いた童子は、岩の壁に偈を書き残す

3. 自らの身を与えるため岩頭から身を投げると、羅刹は、帝釈天となって、童子を空中で受けとめる。

偈を岩に
書き残す

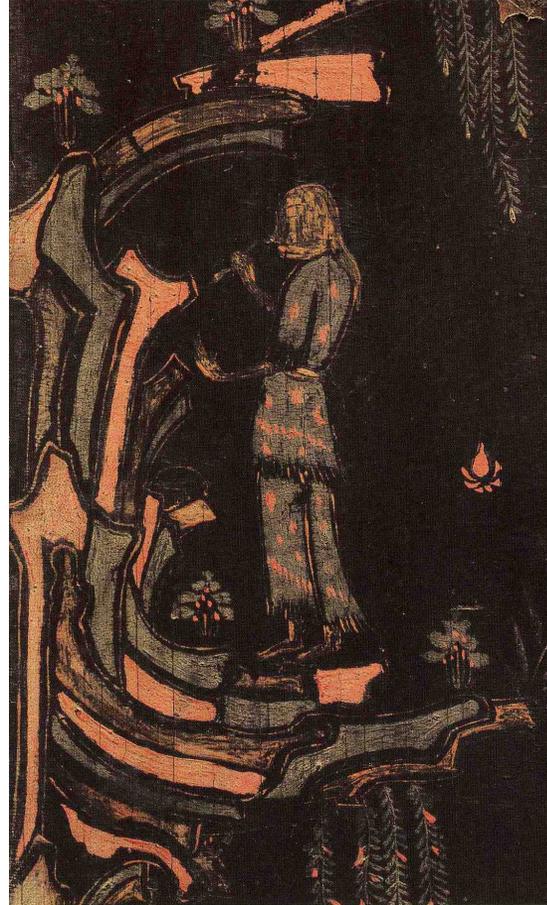
身を投げる童子と
帝釈天に変身する
羅刹



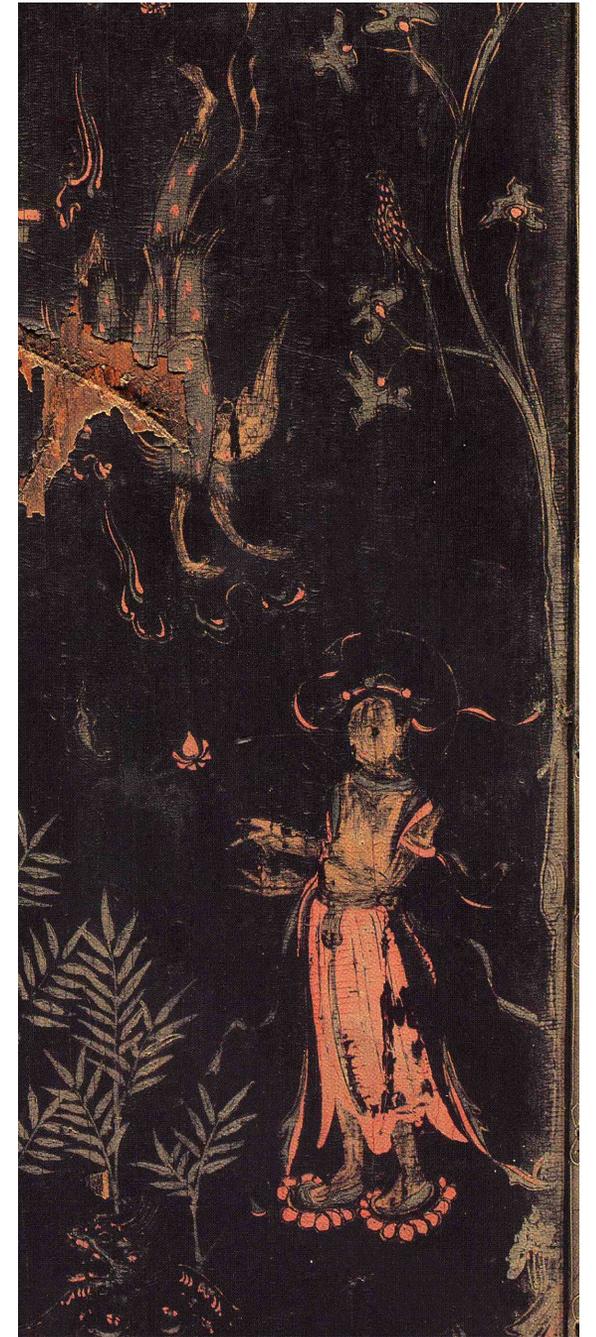
①玉虫厨子の絵画（続き）



場面1



場面2



場面3

【続いて、須弥座右側面に描かれた図について解説を加えます。】

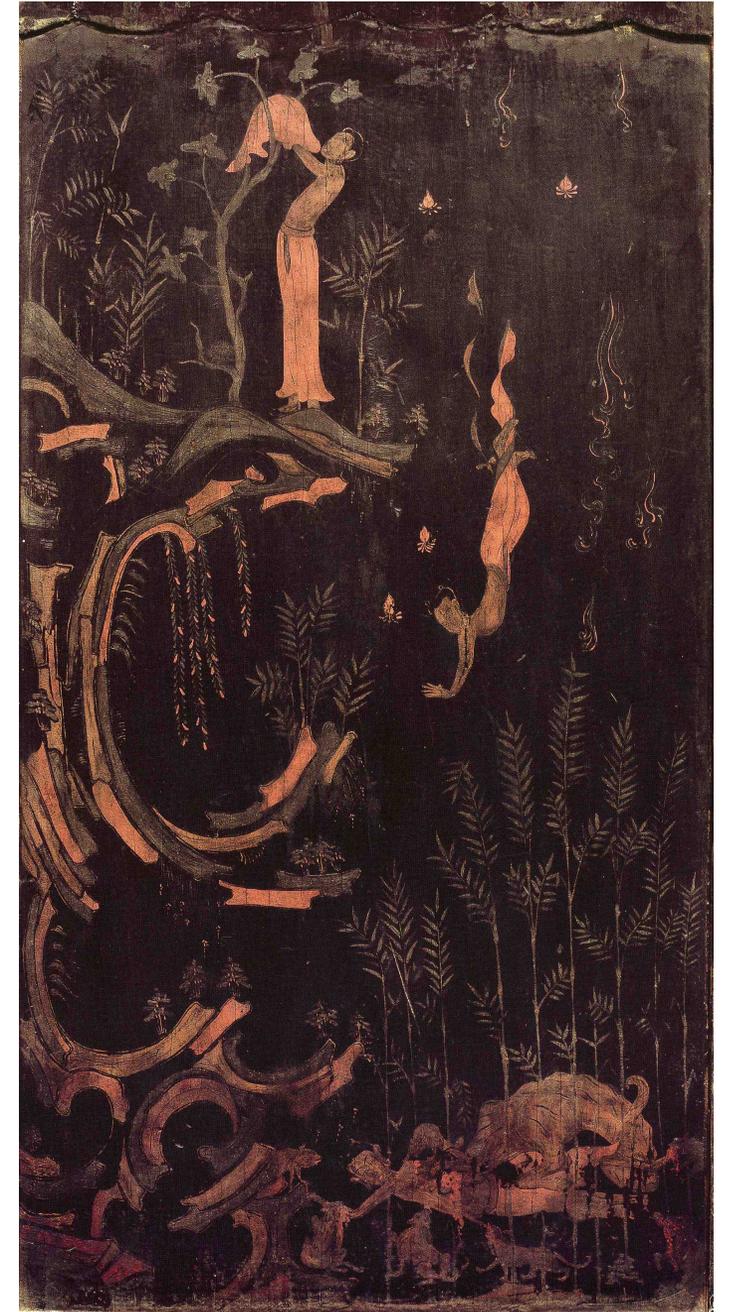
①玉虫厨子の絵画（続き）

（3）須弥座 向かって右側面 捨身飼虎図（しゃしんしこず）

本生譚のうち、「**摩訶薩埵太子**」（まかさったたいしほんじょう）を描いたもの。

『金光明経』の「捨身品」に基づく。

こちらも、「施身聞偈図」と同様、三つの場面を取り上げて、物語を示す。

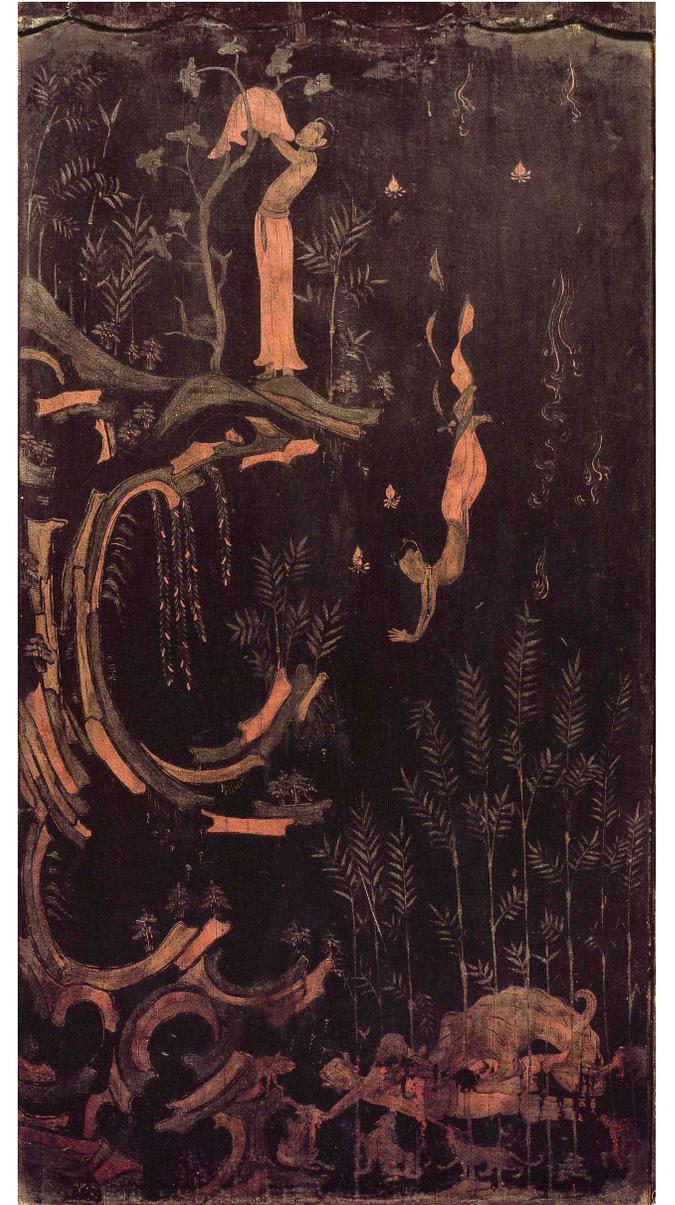


①玉虫厨子の絵画（続き）

【物語のあらすじ】

摩訶薩埵太子が、山中の竹林で七頭の子虎を連れた飢えた虎を発見する。

哀れみの心を起こした太子は、崖から飛び降りて、自己の肉身を虎に喰わせた。



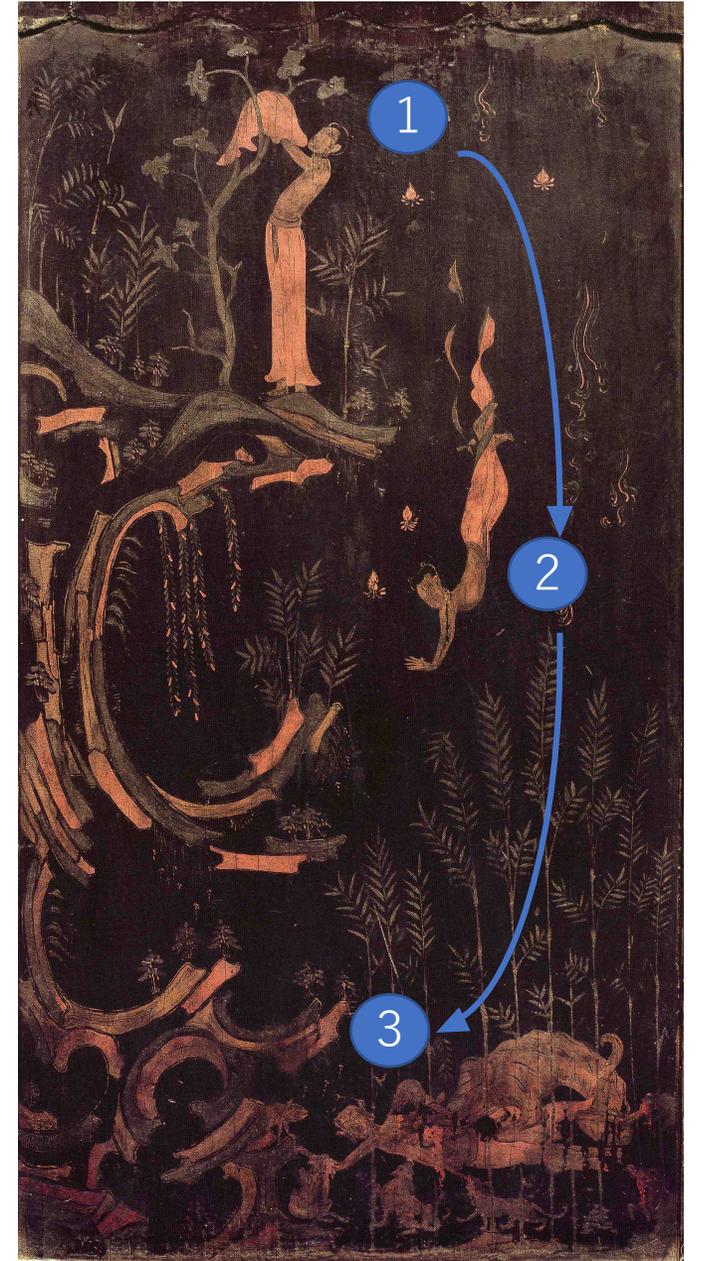
六大寺大観 法隆寺5 建築・工芸・絵画（岩波書店）
奈良六大寺大観刊行会、2001

①玉虫厨子の絵画（続き）

「捨身飼虎図」でも、三つの場面が描かれる。**（三契点表現）**

1. 崖状で上衣を脱ぐ
2. 身を捨てて飛び降りる
3. 自らの身を虎に喰わせる

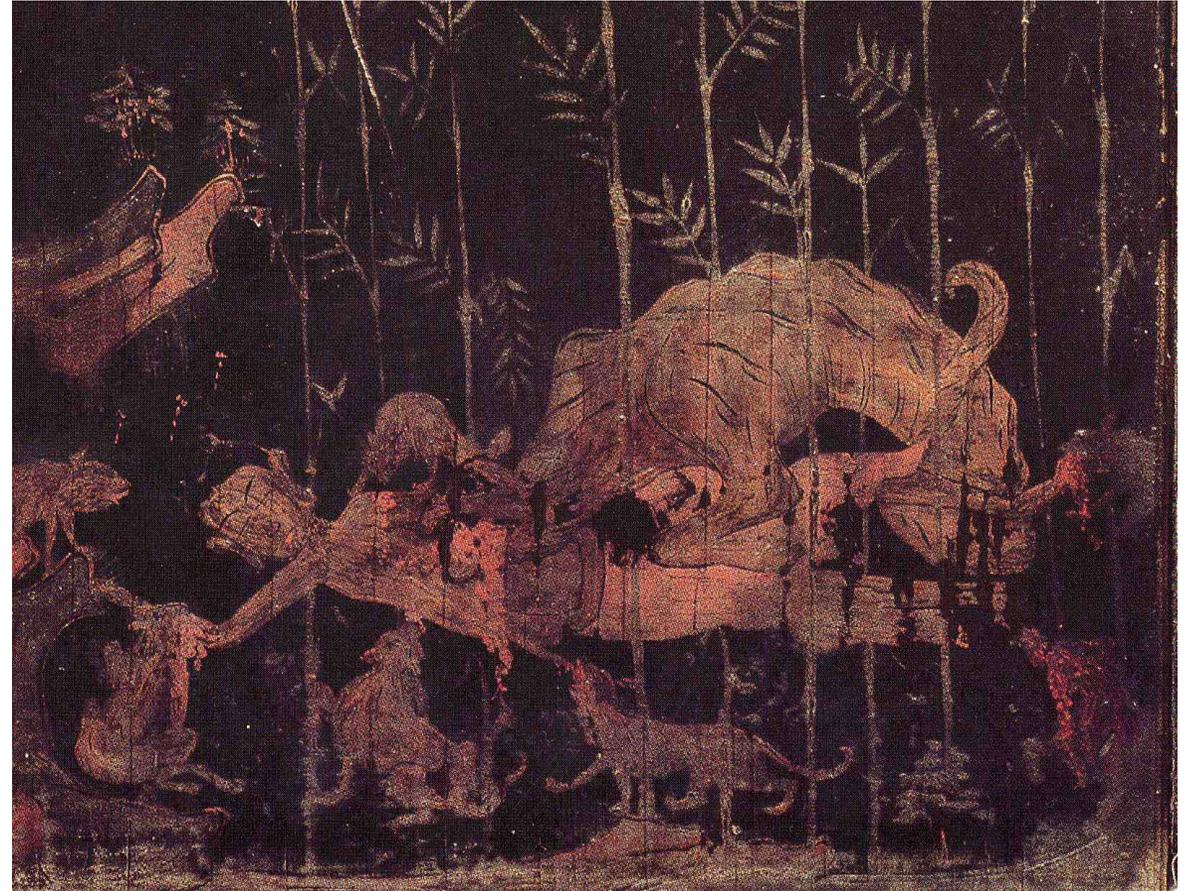
「施身聞偈図」とは異なり、物語全般を満遍なく描くのではなく、クライマックスの場面にしぼって絵画化しているのが違い。



①玉虫厨子の絵画（続き）



場面1と2



場面3

①玉虫厨子の絵画（続き）

（４）須弥座・左右側面の関連性

「施身聞偈図」と「捨身飼虎図」は、主題上、一対の関係にある。

「施身聞偈」 = **悟法**のための**施身**（自らが真理を悟るために身を捨てる）

「捨身飼虎」 = **慈悲**のための**施身**（他者への慈愛から身を捨てる）

以上の二つの施身の行為は、「**不惜身命**」の行為として一対にある。

また、仏教の二大構成要素である「**智恵**」と「**慈悲**」に対応している。

「智恵」は、自己の向上により悟りに至ること = **自利**の精神

「慈悲」は、自らの成果を他者に分配し、他者を受容すること = **利他**の精神

「玉虫厨子」の須弥座左右側面によって、仏教の基本精神（**智恵と慈悲**・**自利と利他**）が、物語を通じて表現されている。

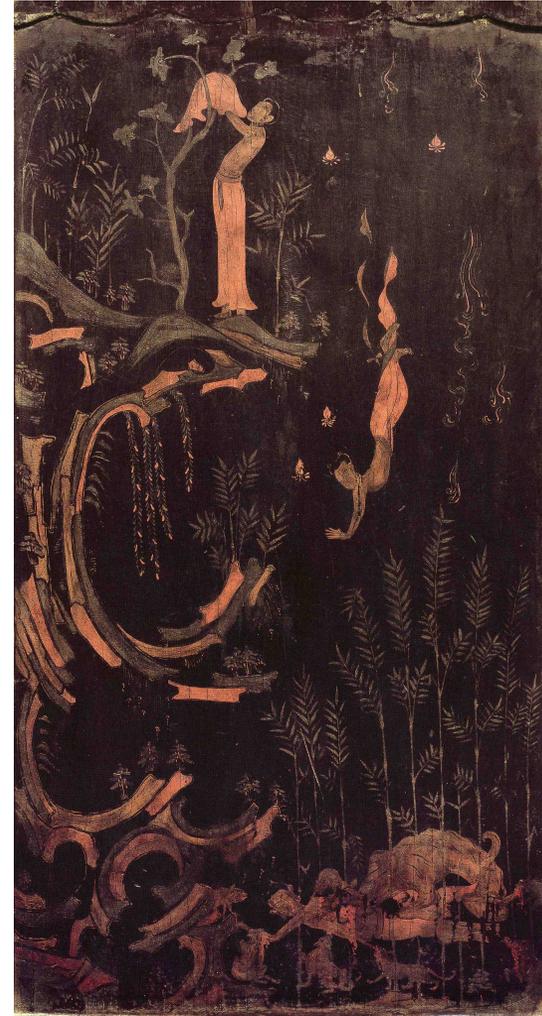
①玉虫厨子の絵画（続き）



← 智恵と慈悲 →

← 自利と利他 →

不惜身命



①玉虫厨子の絵画（続き）

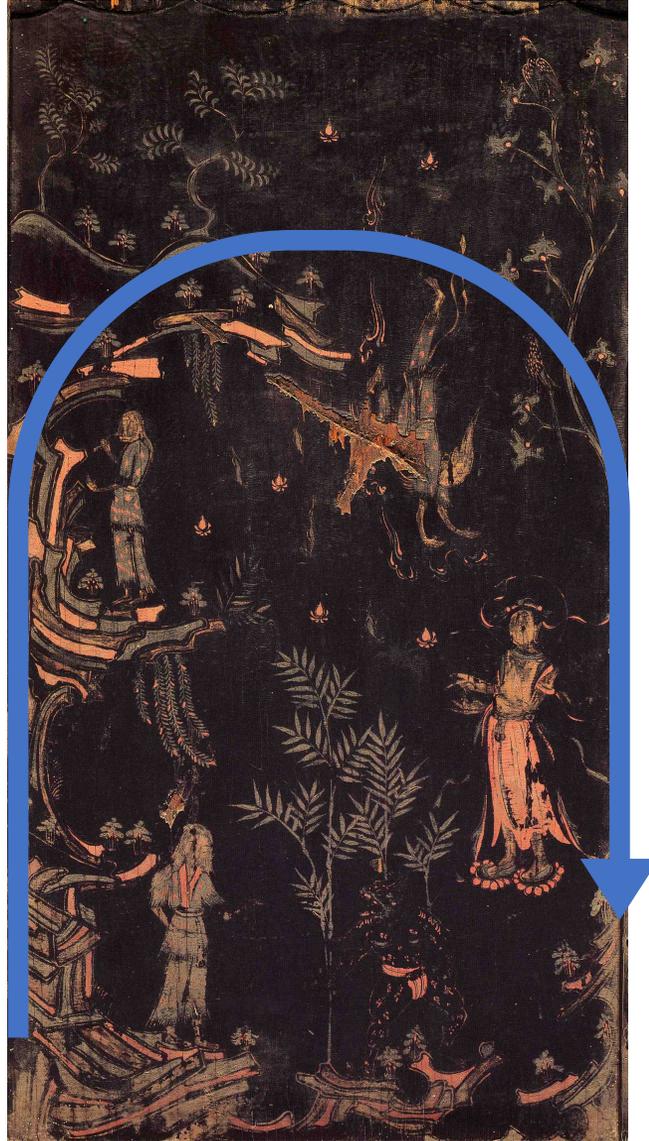
（5）「施身聞偈図」と「捨身飼虎図」の比較

1. 「施身聞偈図」では、麓→山頂→落下と画面を一回転する構成
「捨身飼虎図」では、山頂→落下→麓と一直線の構成

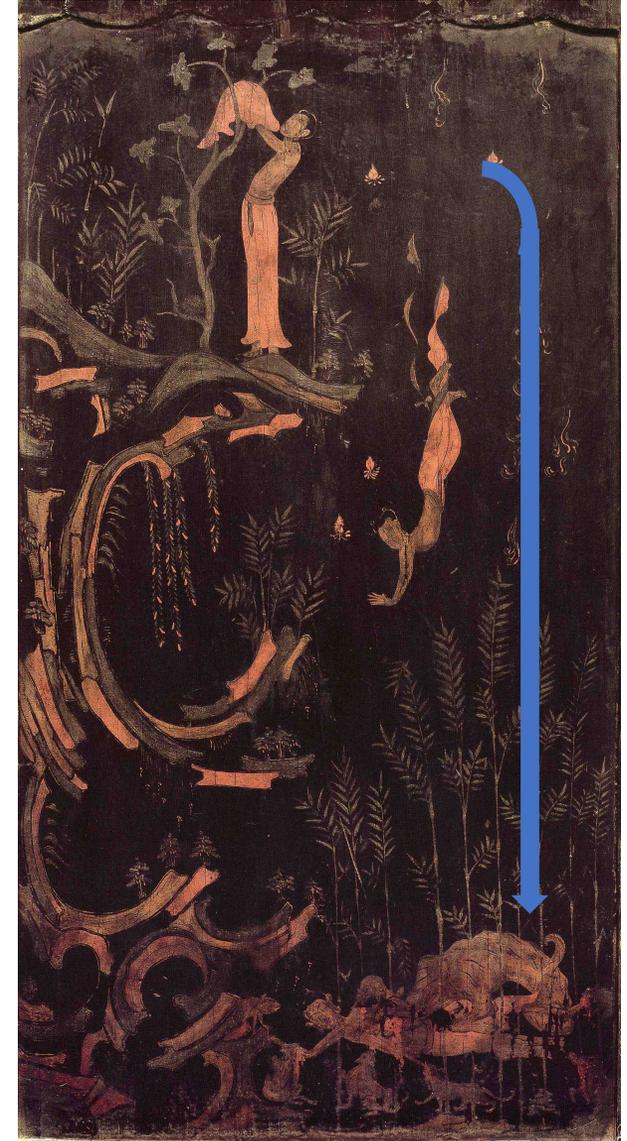
構成法としては、「施身聞偈図」の方が複雑。

①玉虫厨子の絵画（続き）

「施身聞偈図」では一回転する構図



「捨身飼虎図」では一直線に落下する構成



①玉虫厨子の絵画（続き）

2. しかし一方で、様式を見てみると、

「施身聞偈図」は、

- ・画面を広く使えていない。
- ・山岳の骨片は一つ一つが細かく、伸びやかさが無い。
- ・人物も小さく縮こまっている。

など、モチーフの表現に大きさが見られない。

①玉虫厨子の絵画（続き）

他方、「捨身飼虎図」では、

- ・ 山岳を形成する骨片は、大きく伸びやかな筆致で描かれている。
- ・ 場面を画面の枠一杯に描いて、大らかな気分にあふれる。

など、技術的には優れた点を見せている。

「捨身飼虎図」では、場面をクライマックスに選択的に絞り込んでいる点からも、ある程度自主的な表現が許された有力画家が担当していた可能性が考えられる。

①玉虫厨子の絵画（続き）

画面上1/4程度は、活用されていない。



小さい骨片を細かく積み上げる画風



C字形の空間が狭い



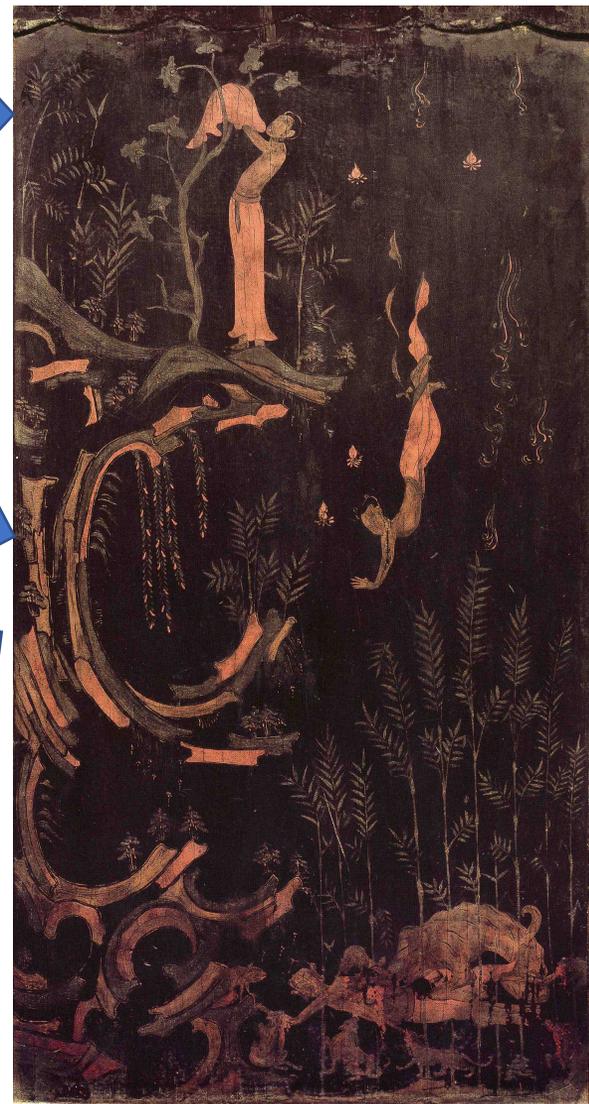
画面を上まで活用



骨片を描く一筆が長く伸びやか



C字形の空間がたっぷり広い



今回の講義はここまでです。

「玉虫厨子」の絵画の中では、最後に見た、「施身聞偈図」と「捨身飼虎図」が、日本の物語絵画の最古例として強い関心を寄せられています。 これらを特によく見ておいて下さい。